

深い意図はなくても、残酷な医療者の言葉

文教大学星野晴彦

がんのサバイバーとしてのお話にとても感銘を受けました。
特に心に残ったのは3点です。

第1は、医療者が淡々と対応し、一番困っているときに彼らが役に立たないということです。

彼らからすれば「多くの同様の状況の人たち」という見方になると思います。自分の割り当てられた仕事に追われているということだと思います。

けれど、それぞれの人には、それぞれの家族がおり、特に自分だけの問題ではなく家族がどう思うかなどと、二重にも三重にも重荷が課せられています。そこに重いが至らない何気ない発言は、とても傷つきます。

それに対してご主人のさりげない言葉は本当に心に響く、また力づけられる言葉だったことでしょう。

私も母を亡くしたときにそうでした。本当に思い起こされます。

「(がんの末期なのだから手足のしびれが出ても)、今効果的な治療をしていないのだから仕方がないでしょう。大学病院は多くの人待っているのだから、早々に転院してほしい」と言われたのでした。深い意図はないにしてもこれほど残酷な言葉はないと思います。

第2は、医療情報が今本当に多く、患者はそれに振り回されているということです。今時インターネットを見ればすぐにさまざまな情報が得られます。

しかし、それぞれに違うのでどれを採用すればわからなくなるのです。全く反対の見解を言う情報もあります。少しでも助かりたい人には、すがりたくなってしまおうと思います。

第3は、「当事者が必ずしもわかっているとは限らない」と謙虚になることが必要ということです。ピアサポーターの中には自分たちでなければわからないだろうという気負った方もいます。しかし、おっしゃる通り自分のわかっていることがすべてではないという謙虚さが必要ということだと思います。

特に気になったのは専門家と言われる人々が、わかっていないことも多く、また時として傷つけてしまうこともあるということです。患者の心に謙虚に耳を傾け、向かい合おうとする姿勢が本当に問われているのだと思います。

母のなくなる前の時を思い出しつつ、とても、心に残るお話でした。ありがとうございました。